



Title	新しい「病院環境」に関する授業が学生に与えた影響
Author(s)	渡辺, 玲奈; 青柳, 道子; 森下, 節子
Citation	看護総合科学研究会誌, 10(1), 71-80
Issue Date	2007-03-30
DOI	https://doi.org/10.14943/37426
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38736
Type	journal article
File Information	10-1_p71-80.pdf



新しい「病院環境」に関する授業が学生に与えた影響

渡辺玲奈 青柳道子 森下節子

(北海道大学医学部保健学科看護学専攻)

Influence of a New “Hospital Environment” Class on the Students' Attitudes

Reina WATANABE, Michiko AOYANAGI, Setsuko MORISHITA

(Division of Nursing, Department of Health Sciences, School of Medicine, Hokkaido University)

要 旨

A大学の看護学概論の中で、新しい病院環境に関する講義の後に学生が自由記載した講義レポートの記述内容を、B.Berelsonの内容分析法に基づき分析した結果、同講義の以下の学習成果を得ることができた。

結果として、【A:新しい環境・建築・病院に対する関心の高まり】、【B:環境が人間に与える影響の考察】、【C:看護と環境の関連性に対する認識】、【D:新しい環境・建築・病院に対する否定的評価】、【E:今後の自己の学習や目標】、【F:講義・教員からの知的刺激】、【G:今後の看護の広がり】、【H:建築・工学への興味】の8カテゴリーが抽出された。

新しい病院環境に関する講義は、看護学概論の目標のうち、特に看護学の主要概念の関連性を理解すること、自己の看護学に対するモチベーションの確認と向上、および広い視野から学ぶ重要性を理解することに有効であることが示唆された。

キーワード：病院環境，看護学の主要概念，看護学概論，教授方法

I. はじめに

看護学の主要概念のひとつである「環境」に関して建築学研究者である長澤は、「病院に行けばその環境にただで治りやすくなるような“癒しの空間”の実現が今後必要である」¹⁾と述べており、建築学の分野でも、「環境」の視点を重視した研究が行われている。また筆者は施設環境に関して、福祉施設や健康を維持・増進する保健施設が増加する中、機能分化した各施設が互いに連携をし、各々の役割を果たすことが重要である²⁾と述べた。これらは、今日の日本の医療環境が病院にとどまらず、対象者に合わせた環境が求められ、多様に変化して

きていることを示すものである。

一方、看護学の教科書等の資料では「環境」に関する記述内容として、採光・音・感染などの内容が多く記載されている。しかし、環境を多様に捉え、その多様な環境を看護師が調整するためには、看護基礎教育の段階から、看護の対象者が生活する環境をイメージできるような講義が重要である。また、この講義の中で、学生が「環境」そのものへ関心を高めるだけではなく、看護の対象である「人間」が生活する環境がどうあるべきか、その環境を整えるための「看護」はどのように実践されるべきかなど、他の主要概念とも関連づけた理解を促す必要が

ある。

今回、看護の対象である「人間」が生活する環境を学生がイメージでき、多側面から検討するために、図や写真を活用した視覚教材を用いて、新しい病院環境に関する講義を行った。それにより、学生は看護学の主要概念である「人間」・「健康」・「環境」・「看護」の各々が意味するものとそれらの関連性を理解し、加えて看護学を学ぶモチベーションを向上させ、さらに広い視野から学ぶ重要性を実感していた。

よって、本研究では、新しい病院環境に関する講義が、どのように学生が環境に関する理解を深め、看護学を学ぶことへのモチベーションを向上させたのか、また広い視野から学ぶ重要性を理解したのかを明らかにすることを目的とした。

なお本研究では、「医療環境」を保健医療福祉施設や在宅も含む、医療を提供する場所全体とし、「病院環境」を医療施設のひとつの環境と捉える。

Ⅱ. A総合大学における看護学概論の授業概要

看護基礎教育において、学生が環境に関して学ぶ第一段階の専門科目として、「看護学概論」が位置づけられるのが一般である。A総合大学（以下、A大学とする）でも同様に、1年次前期の専門科目として看護学概論のみが位置づけられている。したがって、本科目では学生が看護学における環境の重要性に興味を持つよう動機づけになる講義が求められる。A大学の「看護学概論」における「環境」に関する授業では、学生の身近な環境に視座をおき、自己の生活環境に関するグループワークやボディメカニクスを含むベッドメイキングの技術演習を取り入れ、体験を通して環境の重要性を認識するよう工夫している。授業構成は表1の通りであり、同科目の目標は、①看護学の構成要素の理解、②先駆者の生きた時代背景と業績の理解、③看護学を学ぶモチベーションの確認、④医療・看護の

現状から看護学を広い視野で学ぶ重要性の理解の4つである。また、「環境」に関する授業の到達目標は、生活援助技術として生活環境を整備し、人々の生活行動への援助の意義と目的を説明できるとしている。同授業内容は、第4回の看護の歴史の中で、ナイチンゲールが述べている環境の大切さについての講義とグループワークを行い、第9回で学生自身の生活環境として自分の部屋について調査し、快適な生活環境についてグループワークを行う。それを踏まえ、第10回から第13回までは、一般的な病院環境を学ぶためのベッドメイキングの技術演習を行っている。このように、本科目では看護基礎教育における主な教授方法（講義、グループワーク、プレゼンテーション、演習）を全て活用して、「環境」に関する授業展開を行っている。

Ⅲ. 研究目的

A大学の看護学概論の授業における「環境」に関する授業内容の中で、「新しい病院環境」に関する講義による学生の学習成果を、学生が提出した講義レポートの内容分析から明らかにする。

Ⅳ. 研究方法

1. 研究デザイン

記述的研究。

2. 調査方法

第14回に科目担当教授の指導のもと、筆頭執筆者が新しい病院環境についての講義を15分程度行った。今までの病院環境にとらわれない医療環境について、日本だけではなくドイツやイギリスなどの他国を紹介し、国際的な視点で人間の生活する環境や空間を、図や写真を活用したスライドでイメージできるように、講義を行った。具体的内容として、はじめに看護学の主要概念を復習し、その中で環境に関する授業内容（看護覚え書による環境、自分の部屋環境、ベッドメイキングなど）の項目を提示し、再確認した。各項目を詳細に復習するために、ナイ

表 1 A大学における「看護学概論」の授業概要および内容

回	授業概要	内容
1	看護の概念・定義、看護の目的 問題解決法と看護過程	看護学の主要概念および日本看護協会・ICNにおける看護師の倫理要綱に関して講義形式で授業を行う。
2	看護と社会、健康と社会 保健・福祉・医療の提携の現状と期待される看護活動 拡大する看護の役割	保健医療福祉の中での看護の役割や在宅ケアなどの看護活動の拡大について、資料や新聞記事を活用して講義形式で授業を行う。
3	看護と法律(保健師助産師看護師法、医療法)	看護を取り巻く法律と基本的人権について実際の法律の内容等を資料を用いて講義形式で授業を行う。
4	看護の歴史	職業としての看護について、19世紀の社会における看護の状況やF.ナイチンゲールの功績について講義を行う。その後、「F.ナイチンゲールが看護師への教育が必要だと考えた理由」というタイトルで1グループ6名程度でグループワークを行う。
5	第4回のグループワーク続行及び発表	グループワークの発表を1グループ発表3分・質疑2分で行う。各グループがサブタイトルを決め、プレゼンテーションでは、独自の図を用いて発表するように指導する。
6	看護の対象である人間、 健康の概念、健康の段階と生活行動	人間の欲求やライフサイクルについてを資料や事例を活用して講義を行う。その後「看護の対象である人間を、発達段階、基本的ニーズ、健康の水準、学習という点から把握(理解)する必要性について」というタイトルでグループワークを行う。
7	第6回のグループワーク続行	1グループ6名程度でグループワークを行う。
8	第6-7回のグループワーク発表	1グループ発表5分程度で提示された事例を基本的ニーズや発達段階から検討し、発表する。
9	生活環境：「人々を取り巻く生活環境」についてのグループワークおよび発表	独自に作成した演習ノートブック ⁷⁾ を活用し、学生が自分の部屋の生活環境をアセスメントし、人が快適に感ずる環境について記述させる。それを用いて各グループで快適と感じる環境についてグループワークを行う。各グループ3分程度で発表を行う。
10	生活環境：ボディメカニクスを含む演習およびグループワークの発表	ボディメカニクスを活用して実際に患者の水平移動の演習を行う。ボディメカニクスを有効に活用する方法についてグループワークを行い、各グループ3分程度で発表を行う。
11	生活環境：ベッドメイキング演習	ベッドメイキングのVTRを視聴した後、教員がボトムシーツまでのデモンストレーションの後に演習を行う。
12	生活環境：ベッドメイキング演習	ボトムシーツに加え、防水シーツおよび下シーツ、枕の作り方に関するデモンストレーション後、演習を行う。
13	生活環境：ベッドメイキング演習	今までの学習を活用し、ベッドメイキングの演習を行う。
14	新しい病院環境に関する講義・看護と国際協力に関するグループワーク	第9-13回の『環境』についてのまとめとして、新しい病院環境に関する講義を行う。その後、「今後の看護と国際協力」という大きなテーマを提示し、具体的なサブテーマを学生が選択してグループワークを行う。
15	看護と国際協力に関するグループワークおよび発表	第14回のグループワークの発表を各グループ2分程度で行う。

チンゲールが提唱した環境やグループワークで学生自身が発表した内容について提示した。学生自身の学習の振り返りとともに、ナイチンゲール病棟といった過去の病院環境から現在の病院環境の写真を活用して説明し、その後、現在先進的に取り組んでいる新しい国内外の病院環境に関して、写真を用いて講義を行った。

講義の後、「今後の看護と国際協力」というテーマでグループワークを行った。同講義終了後に学生が10分程度で質問や感想を講義レポートとして自由に記述する課題を与えた。なお、

本研究ではこの記載内容を調査対象とした。

なお、筆頭執筆者は、看護学に加え、建築・環境について学び、工学学士および学術修士を取得している。

3. 調査期間

2006年7月。

4. 研究対象

A大学保健学科看護学専攻1年生の「看護学概論」履修者であり第14回の講義レポートを提出した68名。

5. 分析方法

第14回の講義レポートの質問・感想欄の記述内容をB.Berelsonの内容分析を用い、記述の意味内容によって文章を区分し、それを記録単位とした。

6. 信頼性の確保

意味内容によって文章を区分する際に共同研究者と妥当性を検討し、カテゴリー化は、2名の研究者が行った分析内容に関して一致度を算定し、信頼性の確保に努めた。

7. 倫理的配慮

対象者である学生に対して、研究者が本科目の成績評価後に、研究の趣旨、協力への参加は任意であること、個人が特定されないこと、協力の有無による不利益を被ることがないことを説明した後、部屋を退出した。協力の同意が得られた場合は同意書に署名し封筒に入れてもらい、その後封筒の回収を行った。

V. 結果

同意書に署名した学生は全員であったため、提出された全ての講義レポート数68を分析した。そのうちの記録単位は190であった。共同研究者とのScottの式による信頼係数は86.5%であった。記録単位190のうち77は、「グループワークにより自分で考えて、さらに行動に移していくことが大切だと思い、私も何か行動したいと思った」等の記述があった。これらの内容は、第14回のグループワークに対する記録単位であるため、共同研究者と妥当性を検討し、除外した。したがって、残りの記録単位113をカテゴリー化した。以下、カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは〔 〕に示す。

記述内容は表2の通り、【A:新しい環境・建築・病院に対する関心の高まり】、【B:環境が人間に与える影響の考察】、【C:看護と環境の関連性に対する認識】、【D:新しい環境・建築・病院に対する否定的評価】、【E:今後の自己の学習や目標】、【F:講義・教員からの知的刺激】、【G:今後の看護の広がり】、【H:建築・工学へ

の興味】の8つのカテゴリーと26のサブカテゴリーに分類された。

【A:新しい環境・建築・病院に対する関心の高まり】では、「さまざまなデザインの病院があることに驚いた」という記述より〔新しい病院環境に対する驚き〕が、また、「患者さんがより安らいで療養できるような環境づくりについて研究がすすんでいることを学び、病院の環境についてとても興味がわきました。」といった記述より〔病院環境への興味〕といったサブカテゴリーが抽出され、その他4つのサブカテゴリーが抽出された。

【B:環境が人間に与える影響の考察】では、「本格的なものでなくても、ちょっとした工夫で患者さんの気持ちが安らぐのかと今回の講義を受けて感じました。」といった記述から〔病院らしくない環境が患者に与える好影響〕といったサブカテゴリーが抽出され、その他3つのサブカテゴリーが抽出された。

【C:看護と環境の関連性に対する認識】では、「今回の講義を聞いて、環境を整えることによって、患者さんの健康に多くの影響が出るので、患者さんにあわせた環境づくりが求められることを改めて実感した。」や、「患者さんの立場になって患者さんが安心して病気の治療にはげめるような環境を整えることが大切だと感じた。」といった記述から〔看護師が環境整備に携わる必要性〕というサブカテゴリーが抽出された。また、「今まで学んだことを通して患者さんの快適な環境を考えていくことができるということがよくわかりました。」といった記述より、〔これまでの学習のつながりの実感〕というサブカテゴリーが抽出された。

【D:新しい環境・建築・病院に対する否定的評価】では、「お金を持っている人はいい医療を受けることができるが、お金を持っていない人はそのような医療を受けることができず、格差が生じないか心配である。」といった記述から〔患者の経済状況が環境選択に与える格差の懸念〕というサブカテゴリーが抽出され、そ

表2 講義レポートより抽出されたカテゴリおよび学生の記述内容

n = 113

	カテゴリ	サブカテゴリ	学生の記述例
A	新しい環境・建築・病院に対する関心の高まり(42)	新しい病院環境に対する驚き(8)	さまざまなデザインの病院があることに驚いた。
		病院改善の具体案・提案(2)	「患者さんが自分が合う部屋を選らべたらいいのに」と考えました。
		デザイナーズ病院に対する肯定的評価(12)	あのような環境ならば入院生活を楽しみ気持ちで過ごせるのではないかと思います。
		病院環境の新しい知識の獲得(9)	産婦人科の病室が最近きれいになっていることは知っていたけど、普通の病院もきれいになっているとは知らなかった。
		病院環境への興味(8)	患者さんがより安らいで療養できるような環境づくりについて研究がすすんでいることを学び、病院の環境についてとても興味がわきました。
		日本に新しい病院が増えることの期待(3)	日本でもドイツの病院のような明るい病院がふえたらいいと思います。
B	環境が人間に与える影響の考察(9)	無機質な個室が患者に与える影響(2)	一人きりで無機質な病室は孤独を感じやすく、それが心理的に悪影響を及ぼし、回復が遅れることにもつながると思う。
		病院らしくない環境が患者に与える好影響(5)	いずれにしても、本格的なものでなくても、ちょっとした工夫で患者さんの気持ちが安らぐのからと今回の講義を受けて感じました。
		入院患者の反応に対する関心(1)	実際に利用した患者さんがどのような感じをうけたのか興味をもちました。
		デザイナーズ病院が看護師に与える好影響(1)	こころにゆとりができ、よりよい看護を提供できるのではないかと思います。
C	看護と環境の関連性に対する認識(18)	看護師が環境整備に携わる必要性(14)	今回の講義を聞いて、環境を整えることによって、患者さんの健康に多くの影響が出るので、患者さんに合わせた環境づくりが求められることを改めて実感した。 患者さんの立場になって患者さんが安心して病気の治療にはげめるような環境を整えることが大切だと感じた。
		これまでの学習のつながりの実感(4)	今まで学んだことを通して患者さんの快適な環境を考えていくことができるということがよくわかりました。
D	新しい環境・建築・病院に対する否定的評価(10)	患者の経済状況が環境選択に与える格差の懸念(8)	お金を持っている人はいい医療を受けることができるが、お金を持っていない人はそのような医療を受けることができず、格差が生じないかと心配である。
		環境改善による収容人数減少の懸念(1)	もしすべてがそのような大きな部屋だと収容人数が少なくなってしまうのではないですか。現在でも入院するところがないと困っている人がいるのに、これ以上入院するところが減ってしまうのは問題だと思います。
		環境改善による医療機能が正常に機能しないことへの懸念(1)	日本の病院では、ホテルのような豪華な個室がつくられているということでしたが、プライバシーの保護ばかりが叫ばれていて、急に具合が悪くなってしまうときに、すぐに看護師が気づくような工夫についても大事なのではないかと思います。
E	今後の自己の学習や目標(8)	今後の自分の目標への意気込み(5)	看護学と平行して、それに関する学問も学びたいし、自分の気持ちがあれば学べるんだと思った。
		学習意欲の高まり(2)	まずは4年間しっかり勉強することから目標の達成に向けてがんばっていきたいと思います。
		将来の可能性(1)	将来に少し可能性が見えてきたように思います。
F	講義・教員からの知的刺激(12)	プレゼンテーションに対する肯定的評価(3)	とてもわかりやすくまとまっていて、グループワークの参考になりました(まとめ方など)
		講義自体に対する関心(2)	先生の発表は興味の引くものであり、関心を持ちました。
		教員に対する関心・興味(4)	ぜひもっとお話が聞きたいです！
		教員の実体験からの知的刺激(3)	先生が看護と工学の架け橋になっていてすばらしいと思いました。
G	今後の看護の広がり(6)	看護の可能性を考えるきっかけ(3)	これからの看護は環境はもちろんのこと、国や地域、福祉施設との関わりも必要となってくると思った。
		看護師が他職種と関わることの必要性(3)	看護師がいろいろな職業の人と関わって事態を改善させることができるのはとてもいいことだと思いました。
H	建築・工学への興味(8)	建築に対する興味(6)	看護だけでなく、建築などについて考えることもすごいいいなと思った。
		自己の興味との一致(2)	私は中学から高校にかけて建築士になりたいと思っていたので、もっといろいろ話を聞きたいと思いました。

() 内は度数

の他2つのサブカテゴリーが抽出された。

【E:今後の自己の学習や目標】では、「看護学と平行して、それに関する学問も学びたいし、自分の気持ちがあれば学べるんだと思いました。」という記述より〔今後の自分の目標への意気込み〕というサブカテゴリーが抽出され、「まずは4年間しっかり勉強することから目標の達成に向けてがんばっていききたいと思います。」という記述より〔学習意欲の高まり〕というサブカテゴリーが抽出された。

【F:講義・教員からの知的刺激】では、「先生が看護と工学の架け橋になっていてすばらしいと思いました。」という記述より、〔教員の実体験からの知的刺激〕というサブカテゴリーが抽出され、その他3つのサブカテゴリーが抽出された。

【G:今後の看護の広がり】では、「これからの看護は、環境はもちろんのこと、国や地域・福祉施設との関わりも必要となってくると思った。」という記述から〔看護の可能性を考えるきっかけ〕というサブカテゴリーが抽出された。また、「看護師がいろいろな職業の人と関わって事態を改善させることができるのはとてもいいことだと思いました。」という記述より〔看護師が他職種と関わることの必要性〕というサブカテゴリーが抽出された。

【H:建築・工学への興味】では、「看護だけでなく、建築などについて考えることもすごいいいなと思った。」という記述より、〔建築に対する興味〕というサブカテゴリーが抽出され、その他1つのサブカテゴリーが抽出された。

VI. 考察

1. 新しい病院環境に関する講義による4つの主要概念の理解

本科目では、図Aのように第13回目までに、看護学の主要概念について、それぞれ講義やグループワークを行っている。今回、新しい病院環境に関する講義を行うことにより、主要概念のうちの「環境」について学生に広く知識を教

授した。新しい病院環境に関する講義を行う中で、これまでの看護学概論の授業内容との関連性を結びつけることができ、学生自身が看護学の主要概念をより認識できるようになったと考える。以下、4つの主要概念に関する学生自身の理解に注目して考察する。

看護学の主要概念のひとつである「環境」に関しては、本講義により関心の高まりがみられた。これは【A:新しい環境・建築・病院に対する関心の高まり】の中でみられる。本科目ではそれまでに、一般的な病院環境としてのベッドメイキングの看護技術を既習している。そのため、現在の病院のベッドのイメージが形成されたが、本講義により病院環境が変化していることに驚きを感じ、その驚きが、病院環境に対する興味・関心の高まりにつながったと考えられる。また、【A:新しい環境・建築・病院に対する関心の高まり】の中では、「あのような環境ならば入院生活を楽しい気持ちで過ごせるのではないかと思います。」という記述がみられ、看護者として対象の立場に立って療養環境に関して検討できている、どのような環境が対象にとってより良いかに関して関心を高めたと考えられる。これにより、看護学の主要概念である「人間」にも興味を持ち、環境との関連性を見いだすことができたと考えられる。

さらに、【B:環境が人間に与える影響】では、具体的な病院環境の提案や悪影響について検討することができていた。稲垣らは「意味を理解するというのは、新しく与えられた情報と、今までもっていた知識との間に整合的な関係を見つけることである。」³⁾と述べている。学生は、新しい病院環境を述べた本講義の前に、自らの部屋に関する生活環境に関するグループワークを行っており、人間が快適と感じる環境に関して検討ができていた。これは、森下が本科目で「学生自身の生活体験や獲得している知識等を活かしながら看護理論等を踏まえて、援助時の具体的な方法を学べるよう授業の展開を工夫している」⁴⁾ことを示すものである。したがっ

て、自らの生活環境を検討したことが、人間にとってよりよい環境を考察することにつながったと考える。また、ナイチンゲールが、対象者の環境を整えることが看護にとって非常に重要であると述べていることをグループワークで既習している。したがって、本講義は、学生自身の今までの学びの総復習となる内容になっていたと考える。

それに加え、ベッドメイキングの技術演習を行っており、自分の身体を通して快適な環境とは何かを考え、思考することが容易であったことが、よりよい環境を検討することの基礎になったと考える。これは、【C:看護と環境の関連性に対する認識】の中の〔これまでの学習のつながりの実感〕というサブカテゴリーにみることができる。また、〔看護師が環境整備に携わる必要性〕の中では、「今回の講義を聞いて、環境を整えることによって、患者さんの健康に多くの影響が出るので、患者さんにあわせた環境づくりが求められることを改めて実感した。」という記述も見られた。

これらのことから、本講義によって看護学の主要概念である「人間」や人間の「健康」という概念に対する関心を高めていたと思われる。

また、【C:看護と環境の関連性に対する認識】では、「人間」に対する影響だけでなく、看護師が対象の環境を整える必要性に関する記述も見られた。これはベッドメイキングの技術演習をもとに、現在の一般的な病院環境と新し

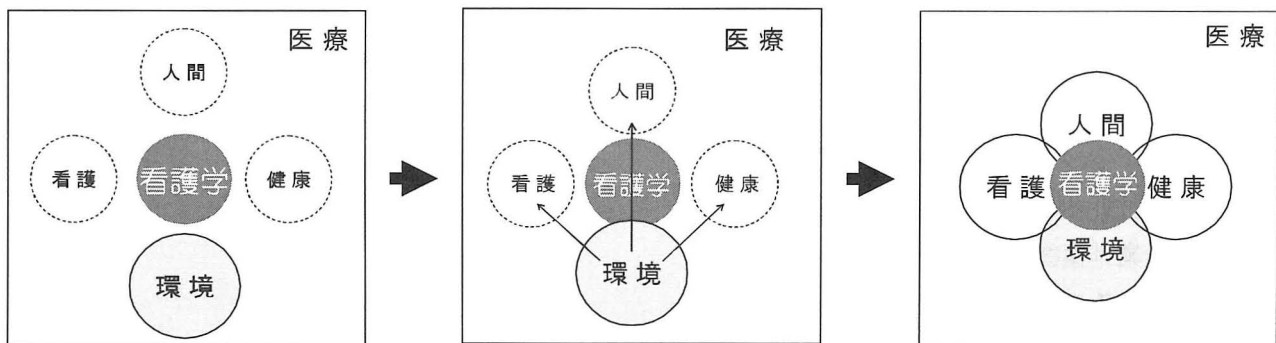
い病院環境がどのように違うかを比較することが容易であったため、さらに発展して、主要概念の「看護」との関連性を認識できたものと考ええる。また、田島は学習過程の組み立てとして、学生は「これまでの個人的知識・経験と比較して両者の関係をとらえながら「看護の概念」を理論的に理解する」⁵⁾と述べている。本授業では個人的知識や経験の確認となる、自らの部屋の環境の快適さに関する既習のグループワークが、「環境」や「看護」という看護の主要概念を理解する基礎になったと考える。

これらのことから、主要概念のひとつである「環境」に着目し、さらに復習となる内容を含めた講義を行ったことにより、図Bのように、「環境」だけでなくその他の主要概念への関心を高め、それぞれの関連性について学生自身が気づきを得ていたと考える。

よって、第14回の本講義は、本科目の最終講義となる第15回で、図Cのように各主要概念の関連性を理解できるとする目標達成を可能にするものであったと考えられる。

2. 本講義と看護学概論の授業目標および環境に関する授業の到達目標との関連性

本講義は看護学概論のまとめの一部に位置づくものである。よって、看護学概論の授業目標の達成との関連性を以下に考察する。また、本講義は、環境に関する授業の一部であり、同授業の到達目標の「生活援助技術として生活環境の整備および人々の生活行動への援助の意義と



図A：第13回目までの講義による学生の学習成果

図B：第14回の新しい病院環境に関する講義による学習内容への影響

図C：学生の看護学概論における到達目標

図 新しい病院環境の講義による学生の看護学の主要概念の理解

目的を説明できる」との関連性について考察する。

1) 本講義と看護学概論の授業目標との関連性

第一に、看護学概論の授業目標①「看護学の構成要素の理解」との関連性について考察する。同科目の第8回の講義までに「人間」・「健康」・「看護」についての講義やグループワークを行い、それぞれに関して学習を積み上げている。第9回から第13回までの授業で「環境」に関する講義・演習・グループワークを行い、それぞれに関しての知識や技術を得る授業展開を行った。その後、第14回において新しい「環境」に関する講義を行うことで、上述したように、環境が「人間」に与える影響や「看護」との関連性を理解することができた。また、環境が「健康」へ影響を与えることも気づいていた。これらのことから、第13回までは各主要概念が別々に意識されていたものが、本講義により「環境」の概念を深く理解し、またそれぞれの主要概念の関連性を学生が自ら気づくことができていた。よって、同授業目標①の達成に近づくことができたと考える(図)。

第二に、同授業目標②「先駆者の生きた時代背景と業績の理解」に関しては、学生が本講義でのスライドの中で、ナイチンゲールが環境に重点をおいた意味やナイチンゲールが設計したナイチンゲール病棟を紹介されたことで、再確認できたと考える。

第三に、同授業目標③「看護学を学ぶモチベーションの確認」について考察する。抽出されたカテゴリーの中の【E:今後の自己の学習や目標】、【F:講義・教員に対する評価】、【G:今後の看護の広がり】、【H:建築・工学への興味】において、今後の学習課題の明確化や学習意欲の向上、他分野への視野の広がりがみられた。よって同授業目標③のモチベーションの確認にとどまらず、その向上につながったと考える。

第四に、同授業目標④「医療・看護の現状から看護学を広い視野で学ぶ重要性の理解」に関しては、【A:新しい環境・建築・病院に対す

る関心の高まり】、【F:講義・教員に対する評価】、【G:今後の看護の広がり】、【H:建築・工学への興味】のカテゴリーが該当する。学生は、現在の医療環境が新しい病院環境へと変化することに驚き、関心を高め、看護職と他職種とが関わることの重要性、および建築や工学といった異分野への関心の高まりを述べたことから、授業目標④の理解が深まったと考える。杉森は、学生が講義の中で満足感を得ることで学習効果があがるため、学生が提出したレポートの評価をタイムリーに返すことも大切だ⁶⁾と述べている。本講義において、これまでの授業での学生自身の学びを紹介したため、学生が統合的な学習成果を講義レポートに記述したと考える。これらの記述は、A大学で1年次前期の唯一の専門科目である看護学概論において重要な、看護学を学ぶモチベーションの向上を示すものと考えられる。

2) 本講義と環境に関する授業の到達目標との関連性

次に、上述した環境に関する授業の到達目標との関連性を考察する。

【C:看護と環境の関連性に対する認識】の中での〔看護師が環境整備に携わる必要性〕において、「今回の講義を聞いて、環境を整えることによって、患者さんの健康に多くの影響が出るので、患者さんにあわせた環境づくりが求められることを改めて実感した。」といった記述などにより、同到達目標が達成されたと考えられる。これも本講義前に行ったベッドメイキングの技術演習により、現在の一般的な病院環境と新しい病院環境がどのように違うかを視覚的に比較することが容易であったことや、対象に適した環境が常に整備され、日々発展していることを、本講義により学習したためであると考えられる。

VII. 本研究の限界と今後の課題

本研究は、第14回目までの講義レポートを分析し考察したものである。よって、看護学概論

全体の目標達成度を明らかにすることはできない。今後は、本授業の最終講義となる第15回や本授業全体における学生の授業目標達成度を分析し検討する必要がある。

VIII. 結論

新しい病院環境に関する講義による学生の学習成果として【A:新しい環境・建築・病院に対する関心の高まり】、【B:環境が人間に与える影響の考察】、【C:看護と環境の関連性に対する認識】、【D:新しい環境・建築・病院に対する否定的評価】、【E:今後の自己の学習や目標】、【F:講義・教員からの知的刺激】、【G:今後の看護の広がり】、【H:建築・工学への興味】のカテゴリーが抽出された。また、本講義が、本科目の授業目標である看護学の構成要素の理解や自己の看護学に対するモチベーションの確認と向上、および広い視野から学ぶ重要性を理解することに関して特に有効であることが示唆された。

この中でも、看護学の主要概念の関連性を学生が自ら気づくことができた点が重要である。「環境」に着目した本講義から、学生が看護者として対象の立場に立って療養環境を調整する必要性を認識し、どのような環境が対象にとってより良いかに関して関心を高めていた。このことから、看護学の主要概念である「人間」にも興味を持ち、環境との関連性を見いだすことができたと考える。特に、学生はベッドメイキングの技術演習により、自分の身体を通して快適な環境を考え、「健康」への影響をも思考することができた。この演習に加えて、本講義により、現在の一般的な病院環境と新しい病院環境がどのように違うかを比較することができ、さらに主要概念の「看護」への関連性を発展させることができたと考える。したがって、本講義は環境に関する授業の到達目標の達成に有効であったと考えられる。

本研究の要旨は、第10回看護総合科学学会学術集会（2006）において報告した。

引用文献

- 1) 長澤泰：「健院」建築，総合看護，41(1)，8，2006.
- 2) 渡辺玲奈：保健医療施設の都市におけるあり方に関する研究，千葉大学大学院自然科学研究科修士論文，28，2006.
- 3) 稲垣佳世子，波多野誼余夫：人はいかに学ぶか，日常的認知の世界，中公新書，137-138，1989.
- 4) 森下節子：大学（短大）における基礎看護技術授業の実践報告，北海道看護教育研究会会報，17，2003.
- 5) 田島桂子：看護教育課程と授業展開-看護教育改革の流れを踏まえて，Quality Nursing，3(12)，1158，1997.
- 6) 杉森みど里，舟島なをみ：看護教育学第4版，医学書院，209，2004.
- 7) 森下節子，矢野理香，中澤貴代編：演習ノートブック「日常生活援助《環境・ボディメカニクス》」第3版，北海道大学医学部保健学科看護学専攻，2006.

参考文献

- 1) B.Berelson, CONTENT ANALYSIS：稲葉三千男・金圭煥訳，社会心理学講座7 内容分析，1～79，みすず書房，1957.
- 2) 田島桂子：看護実践能力の育成と看護学教育，看護総合科学学会誌，8(1)，3-11，2005.
- 3) 森下節子，岩本幹子，古谷純子，宮島直子：患者の自律している動作を中心に日常生活行動を援助する学習効果-右片麻痺と失語症のある模擬患者への援助-，看護総合科学学会誌，6(2)，3-18，2003.
- 4) 矢野理香，森下節子，岩本幹子，中澤貴代，良村貞子：看護過程の理論的枠組みと実践の統合を目指した帰納的教授方略の効果，看護総合科学学会誌，8(2)，3-14，2005.

- 5) 中澤貴代, 森下節子, 岩本幹子: 学内課題演習における独自の援助計画用紙を用いた学習成果-食生活の援助場面の分析-, 日本看護学教育学会誌, 15(2), 51-57, 2005.
- 6) 波多野梗子: 基礎看護学[1], 看護学概論, 医学書院, 175-192 2001.
- 7) 松木光子: 基礎看護学第3版, 看護学概論, 看護とは・看護学とは, ヌーヴェルヒロカワ, 53-94, 2003.

Influence of a New “Hospital Environment” Class on the Students' Attitudes

Reina WATANABE, Michiko AOYANAGI, Setsuko MORISHITA

(Division of Nursing, Department of Health Sciences, School of Medicine, Hokkaido University)

Abstract

Students wrote free-form reports at the end of the new “hospital environment” class within introduction to nursing science. We analyzed content on the reports by Berelson's analysis, and identified student's learning outcome.

Analysis identified the following 8 categories: A. interest in the new environment, architecture and hospital; B. discussion of the influence of environment on humans; C. recognition of relationships between nursing and environment; D. negative assessment of the new environment, architecture and hospital; E. future self-learning and goals; F. Intellectual stimuli from lecture and teacher; G. future development of nursing; H. interest in architecture and engineering.

The study suggested that the class described above was useful to understand relationships among primary concepts in nursing, to recognize and develop motivation toward nursing, and to understand the importance in learning with a broad perspective.

Keywords: hospital environment, primary concepts in nursing, introduction to nursing science, teaching method